

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5555

第六章
テキストの分析



ティカルの神殿 I

ピエドラス・ネ格拉斯

ピエドラス・ネ格拉斯は、グアテマラのペテン州の北西の端、メキシコとの国境を流れるウスマシタ川の右岸にある。一八九五年、この地を最初に訪れた探険家テオベルト・マーラーによると、川岸に黒い砂岩がみられるところから、ピエドラス・ネ格拉斯（黒い石）と呼ばれるようになったという。ピエドラス・ネ格拉斯の王朝については、プロスクリアコフの業績を述べたときふれた。全シリーズについてくわしく述べることはできないので、ここでは、七つのシリーズのうちの三番目のシリーズをとりあげてみよう。

第三シリーズは、9・12・14・13・1 7イミシュ19パシュ（六八七年）からはじまる。それは即位のモチーフを刻んだ石碑6に記されている。この王の名は、石碑6のほかに、石碑8や石碑3に生起する。この王は、9・11・12・7・2 2イック10パシュ（六六四年）に生まれ、9・12・14・13・1 7イミシュ19パシュ（六八七年）に即位した。

石碑1と石碑3には、ほかのシリーズにはみられない女性が刻まれている。その女性が王とどんな関係にあるかをみてみよう。

図85は石碑3の文字部分である。このテキストの下には、台座に女性が坐り、その横に小さな人物が女性のひざにひじをつけて坐っている場面が描かれている。

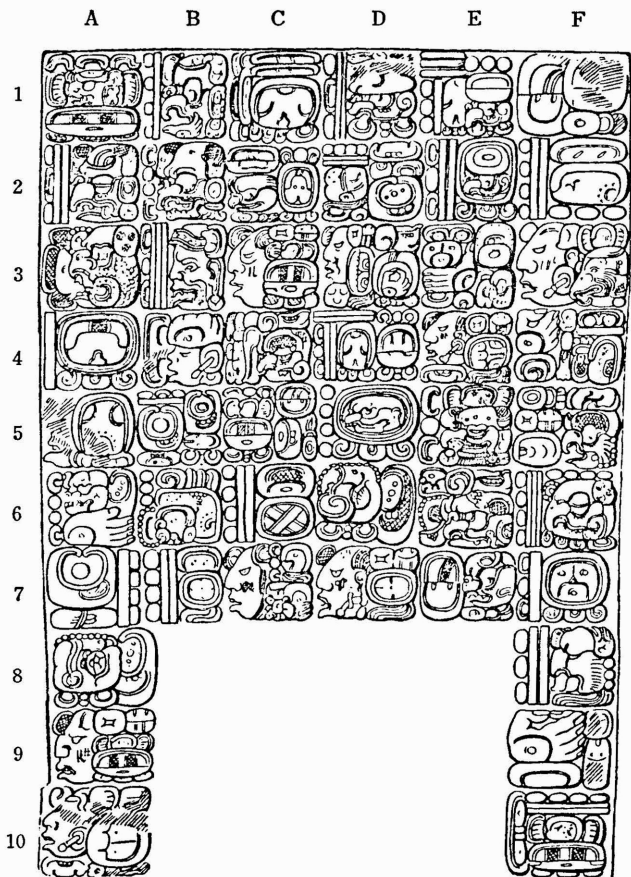


图85 石碑3 (A. P. Maudslay 画)

テキストのA1からB7まではイニシャル・シリーズで、9・12・2・0・16 5キップ14ヤシュキン（六七四年）の日付が刻まれている。A8は誕生文字で、次の二文字は女性の名である。

石碑1もおなじイニシャル・シリーズではじまり、おなじ文字群がつづく。しかし石碑1では、三文字で女性の名が表わされているのに対し（図71）、石碑3では二文字で女性の名が表わされている。その最初の、女性標示文字にカトゥンのついた文字が両者に共通するのみである。石碑1の女性を描いた人物の頭飾りのなかに、カトゥンの文字が刻み込まれていることから、それが女性の名のもっとも大切な部分と考えられる。

その日から12・10・0たった日、1キップ14カンキンの日が、C1からD2aに記されている。C1、D1はディスタンス・ナンバーで、C2aは前の日にこのディスタンス・ナンバーを足せという文字である。その日になにがあったかはD2bの文字が示している。この日付は石碑1にも記されており、また、D2bとおなじ文字がその日付のあとに生起していることから、おなじことを表わしていることがわかる。

それから1・1・11・10たった日、4キミ14ウオは、D4からC6に記されている。1・1・11・10というディスタンス・ナンバーはD4とC5aにあり、C5bは前の日にこのディスタンス・ナンバーを足せという文字である。ウイナルとキンの係数は、ウイナルの文字についているが、左上端を占めるほうが先に読まれるという原則を適用すると、ウイナル文字の上についている10

がキンの係数で、左についている11がウィナルの係数となる。前の日1キップ14カンキンに、1・1・11・10のディスタンス・ナンバーを足すと、4キミ14ウォとなるが、その日はD5、C6に記されている。計算からも、ディスタンス・ナンバーの読みが正しかったことがわかる。

その日のあとにまた誕生文字が生起している(D6)。そしてその次に、前にあった文字群とよく似ている文字群が生起する。女性標示文字がついているので、この人物も女性である。おそらく場面に描かれた小さな人物がこの女性であろう。最初の女性——この女性を弁別する文字はカトゥンであったので、この女性をカトゥン姫とでもいっておこう——の誕生より、1・14・3・10(約三四年)後に誕生している。この女性の名には、私たちになじみの深いキンの文字素があるので、キン姫とあだ名をつけてみよう。

キン姫の誕生から3・8・15たった日、11イミシュ14ヤシュは、次のE1からF2に記されている。その日の出来事はE3からE6までである。

E3aはふつうなら動詞である。しかし、この文字は、先にみた母と子の関係を表わす文字である。その文字の次のF3、E4は、カトゥン姫を表わす文字の少し変化した文字にすぎない。どこが変わっているかといえば、カトゥンの構成素のトゥン文字が頭字体に置き換わっているところだけである。キン姫はカトゥン姫の子どもと考えることができる。そうするとここでも、E3aは母と子を表わす文字とみてさしつかえない。

母がでてきたのだから、次に父がでてくるはずである。しかし、前章でみた父と子を表わす文字はここにはみあたらない。そのかわりに、1カトゥン5トゥンがF4b、E5に記されている。F4aは「期間の終り」を表わす文字の一つであることはすでに学んでいる。F5aは即位を表わす文字であることももう知っている。F5b、E6は、ピエドラス・ネグラスの第三代の王の名である。つまり、F4からE6は、第三代王の即位から二五年たったことを表わす節である。父と子を表わす文字はなかったが、予想どおり、キン姫の父、カトゥン姫の夫とみなせる第三代の王がここに生起している。

E3からE6までは、五章で父、母、子の関係をみたときとおなじ構造である。ここでもまず母があり、そして父の名が生起した。ただ父を表わすほうは、五章でみた構文と違い、即位から二五年たったと書かれている。11イミシュ14ヤシュは長期暦の9・13・19・13・1にあたる。その日は王が即位した日9・12・14・13・1　7イミシュ19パシュから、ちょうど1カトゥン5トゥン(二五年)たっている。

F6から最後のF10までは、前の日11イミシュ14ヤシュから「4・19たった日、6アハウ13ムアン、カトゥン14の完了」と書かれている。つまり9・14・0・0・0　6アハウ13ムアン(七一年)で、これはこの日の奉納日とみることができている。

私たちはほぼ完全にこのテキストを理解できた。よくわからなかったのは、D2bの文字(図86

9・12・14・10・11	9 チュエン 9 カンキン	石碑 1
9・12・14・10・14	12 イシュ 12 カンキン	石碑 7, 8
9・12・14・10・15	13 メン 13 カンキン	石碑 3 (男性面)
9・12・14・10・16	1 キップ 14 カンキン	石碑 1, 3 (女性面)
9・12・14・10・17	2 カーパン 15 カンキン	石碑 8

表 6

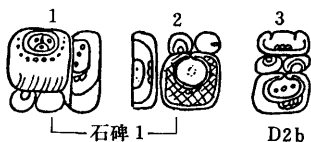


図86

の3)である。この文字は石碑1にもでてくる(図86の2)といった。石碑1には、この文字に関係する日よりも五日前の9チュエン9カンキンの日のことも記されている(図86の1)。カトゥン姫の一二歳頃のある出来事を表わす文字と考えられるが、これだけではわからない。しかしこれらの日にひじょうに近い日付が、ほかの石碑に記されているので、推測が可能である(表6)。

上で示したように、七日のあいだに五日が記されている。その最後の日付に関する節は、図87に示したように、カトゥン姫と第三シリーズの王の名が、結婚を表わすと考えられたT552を介して生起している。それゆえ、これらの日付は、結婚のための一連の儀式を記したものであるのかと考えることができる。王二歳、カトゥン姫一二歳のときのこと



図87

である。

石碑3を理解しようとしたことで、いろいろなことが明らかになった。第三代の王は、9・11・12・7・2 2イック10パシユ（六六四年）に生まれ、一二歳のときに一二歳のカトゥン姫と結婚した。そしてその日から四日後の9・12・14・13・1 7イミシユ19パシユ（六八七年）に即位した。碑文からみたかぎりでは、二二年も子に恵まれなかったカトゥン姫は、三四歳になってやっと子を授けられる。その子をキン姫と名づけた。

ヤシユチラン

ピエドラス・ネグラスのすぐそばを流れるウスマシタ川の上流には、ヤシユチランがある。ヤシユチランにおける石造記念物の建て方や内容は、ピエドラス・ネグラスのものとはだいぶ異なっている。イニシャル・シリーズをもつ石碑は少なく、また、五年ごとに記念碑を建てる習慣もなかった。ヤシユチランとピエドラス・ネグラスのあいだに交流があったことは、地理的に近いからばかりでなく、紋章文字や王の名などのよく知られている文字からも否定できないが、このように記念碑の建て方がまったく異なることは、ひじょうに興味深い。

ヤシユチランのテキストの主流は、ほかの遺跡ではほとんど利用されることのなかったリントル（楣石）である。リントルには、征服の場面や自己犠牲の場面など、数々の場面が刻まれている。

る。征服の場面を刻んだリントル 8 (図 81) の分析でわかるように、どちらかというところ、場面が主で、文字テキストが従の關係になっており、場面は短い文字テキストを理解するための手助けとなっている。リントルのほとんどは、カレンダー・ラウンドの日付しか記していないので、年代決定には困難が伴う。このことは、文字の理解にも大きな障害となっている。

また、石碑や祭壇は保存状態が悪く、利用できる碑文は限られている。しかも、それらの判読できる碑文のすべてが利用できればいいのだが、悪いことに、利用できる写真や手書きの資料も限られている。そのため、活用できる石碑やリントルなどの資料はますます限定されている。

このような数々の障害にもかかわらず、プロスクリアコフは、ヤシュチランの碑文を研究し、楯ジャガーと鳥ジャガーと名づけた二人の王を中心に、ヤシュチランの歴史を再構築した。その再構成には数々の問題点が含まれているのであるが、すべてをとりあげることはできないので、ここでは興味深いところだけをみていくことにしよう。

ヤシュチランの王朝には、楯ジャガーと鳥ジャガーの名をもつ人物がそれぞれ三人いたと考えられている。これらの王のなかで重要なのは、楯ジャガーⅡと鳥ジャガーⅢである。そのほかの楯ジャガー王や鳥ジャガー王は、テキストに一回または数回しかでてこない王で、実際に存在したかどうか疑わしい王もいる。

ほとんどの碑文は、楯ジャガーⅡと鳥ジャガーⅢを扱っている。それゆえ、以後楯ジャガーⅡ

をたんに楯ジャガーと呼び、鳥ジャガーⅢのほうも鳥ジャガーと呼ぶことにしよう。まず、この二人について少し述べておこう。

楯ジャガー王は、9・10・15・0・0（六四七年）頃生まれたと推定されている。しかし誕生も即位も記されていない。石碑18や石碑20からみて、おそらくプウク地方から侵入してヤッシュランを征服した王と考えられる。石碑18の日付は3エツプ14モルであるが、このような日付はマヤ古典期にはない。また石碑20の日付も古典期表記と違い、6イッシュ16カンキンである。イッシュに対する月の係数は、2、7、12、17のうちのどれかであるので、これまた古典期の日付様式にのっとっていない。このように、どちらも古典期の日付表記とは異なること、また石碑の様式も古典期様式と異なり、プウクの（先のとがった石碑、ふとももの顕著な丸みなど）であることから、古典期の日付表記に慣れていない人、すなわちプウク地方からきた人と考えられているのである。

しかし、この二つの日付のうちのあとのほうの3エツプ14モルは、9・14・17・15・11 2チ
ユエン14モル（七二九年）と考えられている。その日は楯ジャガーが最初に登場する日、9・12・8・14・0（六八一年）（石碑19）より五〇年近くもたっているので、もはやマヤ表記に慣れていない人によって刻まれたとはいえない。このように楯ジャガーは、プウク地方の出身とはいえない。しかしこの頃プウク地方から、なんらかの影響があったことはまちがいない。

楯ジャガーが登場する二番目の日付は、先の日より一日後の、9・12・8・14・1 12イミシ

ユ4ポプの日である。その日はアハウという捕虜を捕えた日であるばかりでなく、ほかに三人の捕虜をつかまえた日でもある。アハウという人物はかなり重要な人物であったようで、それ以後楯ジャガーの名には、「アハウを捕えた人」という句がついてくるものがふつうとなる。それから一二月後に、T714 (図80の1) が示す儀式が行なわれている。その後、「カン・クロス」や「チュエン」といった捕虜をつかまえ、9・15・10・17・14 (七四二年) に死亡した。

鳥ジャガーの場合は、誕生の日も即位の日もはっきり記されている。誕生は9・13・17・12・10 (七〇九年) である。彼の即位は、9・16・1・0・0 (七五二年) だが、前の王である楯ジャガーの死亡した日、9・15・10・17・14 (七四二年) からその日まで、約一〇年のあいだがいている。このあいだには権力闘争があり、鳥ジャガーはそれに勝って王位についたようである。

即位を記した石碑11には、それ以前の、即位に先だつ征服と王位の継承(指名)が刻まれている。石碑の裏面の日付は、9・15・19・1・1 1イミシュ19シュル(七五〇年)である。鳥ジャガーが太陽神の仮面をかぶり、小人神をかたどった笏と棍棒をもって、三人のひざまずいた捕虜の前に立っている。これは征服を表わす図とみてよい。上部には楯ジャガーとその妻が描かれている。おそらく、死んだ二人の記念であろう。石碑の表のほうには、9・15・15・0・0 (七四六年) と、9・15・9・17・16 (七四一年) の日付が記されている。碑文の内容は十分に理解されていないが、場面は二人の人物がバトンをもって向きあって立っているところである。それゆ

え、こちらのほうは王位の継承を表わす図とみられる。これらから石碑11は、即位に先だつ征服と王位の継承を表わしていると解されるのである。

また、リントル 16 (9・16・0・13・17 6カーバン5ポブ 七五二年)には、プロスクリアコフが「月の一族」と名づけた人物が征服されたことが記されている。鳥ジャガーの即位の日、9・16・1・0・0 (七五二年) よりも前の出来事である。

鳥ジャガーはまた、リントル 48や47などの遠い祖先の碑を再利用している。

このように、鳥ジャガーは、即位の前の征服や前任者の楯ジャガーのことを記し、さらには遠い祖先の碑を再利用した。それはとりもなおさず、楯ジャガーが死んだあとにおこった争いに勝ったことばかりでなく、自分は正当な家系の王であるということを知らしめるために必要な作業であったにちがいない。

楯ジャガーの碑に比べると、鳥ジャガーの碑には征服の場面は少なく、そのほかの場面のほうが多い。きつと安定した政権であったからにちがいない。ヤシュチランの全盛期を築いた王といえよう。鳥ジャガーの死はいつ頃かわかっていないが、9・16・17・6・12 (七六八年) 頃と推定されている。

年齢の問題



リントル24
9・13・17・15・12



リントル27
9・15・10・17・14

図88

楯ジャガーと鳥ジャガーについて簡単に述べてみた。このなかで一番問題になるのは楯ジャガーの寿命ではなからうか。碑文から推定される彼の寿命は、じつに九〇歳を超す。そんなことがあるのだろうか。碑文の分析からだされたマヤの王たちの寿命は、概して長い。楯ジャガーの九〇を超す年齢をはじめ、パレンケの大王バカルは八〇歳、ティカルのA王もそれに近い年まで生きていた。ピエドラス・ネグラスの王の寿命は六〇歳、六四歳、五六歳といずれも高かった。マヤ社会は老人の支配した社会だったのだろうか。

楯ジャガーの年齢の推定のもととなったのは、いわゆるベンハイチ・カトゥン表記である。ベンハイチ・カトゥン表記は、楯ジャガーの場合、図88のように、4と5の係数のついたものしかない。ベンハイチ (T168 図61) のついていない、ただの3カトゥン表記は石碑20にみられる。これをベンハイチ・カトゥン表記とおなじものとみると、10・0・0を境に係数は一つずつふえており、カトゥン(二〇年)ごとの年代を表わすものと解釈できる。そうすると、楯ジャガーの誕生日は、9・10・15・0・0(六四七年)頃となる。そして

9・15・10・17・14（七四二年）に死ぬまで、じつに九〇歳以上生きたことになる。

ベン・イッチ・カトゥン表記の係数は、カトゥンごと、つまり二〇年ごとに一つずつふえている。これはかなり一貫しているが、矛盾がないわけではない。たとえばリントル25のAとF4は、5イミシユ4マック（9・12・9・8・1）のことを扱っているのに、楯ジャガーには4ベン・イッチ・カトゥンがついている。またリントル32、53では、9・13・5・12・13で、楯ジャガーの3カトゥン目の日付であるのに、5ベン・イッチ・カトゥンとなっている。こうした例をみると、ベン・イッチ・カトゥンから年齢を導きだすのはよくないといえるかもしれない。しかし、このような例外はごくわずかであり、ほぼ一貫して、ベン・イッチ・カトゥンは、二〇年ごと、つまり一カトゥンごとに一つずつ係数がふえているので、その表記は年齢を表わすというこの意見は捨てがたい。

そうかといって、正しいともいいきれない。先に述べた矛盾のほかにも、この解釈に疑問を感じる例をつけ加えることもできる。碑には楯ジャガーが描かれている。どれも若々しい。もしベン・イッチ・カトゥン表記が二〇年ごとの年齢を表わすのなら、その係数がふえるにつれて、描かれている楯ジャガーも老いていってよいようなものである。

描かれている人物は実像ではないという考えは、碑に描かれているのは神、または神官であるという意見に代表されるように、以前からあった。しかし歴史上の人物を扱ったものなら、少し

は実物に似ていてもよいはずである。実際キリグアの石碑では、年をへるごとに人物像は老けていき、実像に近く描かれている。それゆえベン・ヒッチ・カトゥンが二〇年ごとの年齢を表わすという解釈が正しいとすると、碑の像は実際の人物像を表わしていないということになる。プロスクリアコフが述べているように、楯ジャガーに関連ある建物22の周辺で、ひじょうに年老いた人の骨と、三人の女性の墓が掘りあてられるようなことでもあるなら、そのような疑問はたちどころに解消するのであるが。

鳥ジャガーの活躍は、彼の3カトゥン目（四〇歳から六〇歳）にあたる。ベン・ヒッチ・カトゥン表記も3の係数しかなく、このことは、ベン・ヒッチ・カトゥン表記がカトゥンごとの年代を表わすという仮定によくあっている。いまのところ、この仮定に替わるものはない。そこで、ここでも、若干の疑問を感じるものの、ベン・ヒッチ・カトゥン表記は、カトゥンごとの年代を表わすものとみておこう。ちょうど私たちが十代、二十代というように、マヤ人は、1ベン・ヒッチ・カトゥン、2ベン・ヒッチ・カトゥンといったとみることができ。

王の名前

王の名前には、ほとんどの場合、捕えた捕虜の名がついている。楯ジャガーを例にとつていうと、図88のように、「楯ジャガー “死” を捕えた王 ヤシュチラン」とか、「楯ジャガー “アハ

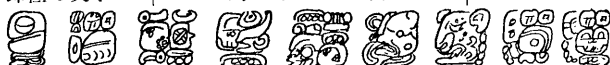
ウ」を捕えた王 ヤシュチラン」といった句を作る。

楯ジャガーの場合、たくさん捕虜がいるが、一番よくでてくるのは「アハウ」とあだ名されている捕虜である。そのほか、「チュエン」とか「カン・クロス」と名づけられた捕虜がいる。「死」とあだ名された捕虜もいるが、頭蓋骨の上部に「アハウ」の文字素があること、「死」の生起するリントル45は「アハウ」を捕えた日とおなじ12イミシュであることから、「アハウ」と同一人物とみられている。いずれの場合も、「アハウ」と共起しないのでまちがいない。

鳥ジャガーの場合は、捕虜の名は「カワック」と「宝石頭蓋骨」である。「宝石頭蓋骨」については、リントル8の説明のときふれた(図81)。鳥ジャガーの名の一部にてくる捕虜は、「カワック」が一番多い。楯ジャガーの「アハウ」に匹敵する、かなり重要な捕虜であったとみなすことができる。

鳥ジャガーは、楯ジャガーと違い、別名をもっている。図89の石碑12の節は、鳥ジャガーの即位した日とおなじ日付に関する節である。鳥ジャガーを表わす文字とはかなり異なり、またところ別人のようである。しかし、鳥ジャガーの即位とおなじ日付であり、しかもその名の前に即位の文字が生起するので、同一人物とみなすことができる。同節はリントル21にある(図89)。即位から九日後のことを記しているが、こちらには鳥ジャガーの文字がある。また、この二つのテキストは共通の文字をもっている。特徴あるのは、結婚を表わすときに使われるカット文字

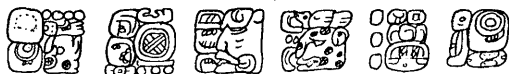
即位の文字



石碑12

鳥ジャガーの別名

鳥ジャガー



リンテル21

図89

(T552)に爪らしきものが上に乗った文字である。プロスクリアコフは、この爪に注目し、この人物を「鳥―爪ジャガー」と名づけた。鳥ジャガーの別名である。

女性

楯ジャガーと鳥ジャガーのテキストには、女性が何人かでてくる。それらの女性がどういう関係にあるのかみてみよう。

建物44の中央入口の階段の下部の文字テキストには、母と子、父と子を表わす文字がでている。テキストの構造も、五章で説明した構造とおなじ楯ジャガー―母―父となっているので、楯ジャガーの両親にちがいない(図90の1)。

それでは母の名を表わす文字は、楯ジャガーの母の死亡を表わすとみられるリンテル27の文字群(図90の2)とおなじなのであろうか。名前を表わす文字群は、一見したところ異なっているようにみえる。しかしよくみるとおなじ文字の変形したものであることがわかる。それはこれまでみてきた知識を少し応用すればわかる。

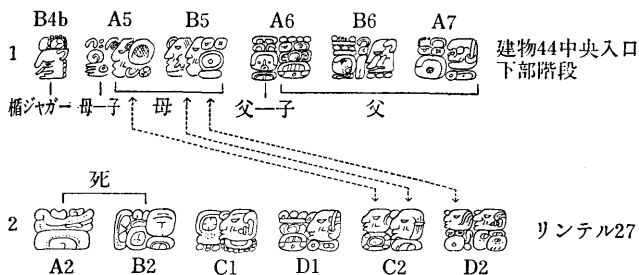


図90

リントネル27のC2の左下の文字素は、「楯」の文字である。この文字はパレンケの大王パカルを表わす文字としてもでてくる。パカルを表わす方法には、「楯」を描いて表わす方法と、パとカとラという音節文字で表わす方法と、両者をもに用いる方法の三つがある。このパカルの表わし方については、二章の八二〜八三ページでふれているので参照してほしい。いま問題にしている母の名を表わす文字を比べてみると、建物44の場合(A5)は、右下は消えてよくわからないが、右上にはパという音節文字がある。一方リントネル27では、C2の左下に「楯」の文字がみえる。パカルの表わし方を考えると、両者はおなじものであると推測できる。

それは、その文字の次にある文字B5の左半分とC2の右半分がおなじで、B5の右半分とD2の左半分がおなじであることから、正しい見方であったことがわかる。これは両方とも二つの女性標示文字とムルクを主字とする文字から成り立っている。ただしリントネル27のD2の右下の文字はいわゆるバカブ文字で、節の終りによくてくるものである。これはB5にはない。これで両者は一見違



石碑11

図91



リントール41



E

F

G

H

I

J

K

リントール17

図92

うが、同一人物の名を表わしていることがわかった。リントール27のほうは、9・13・13・12・5 6 チクチャン8サクの日(七〇五年)に関する文字群である。A2、B2は死を表わす句とみられているので、この日が楯ジャガーの母の死亡した日とみることができると。

楯ジャガーには、もう一人の女性がいる。こちらは妻である。この女性の死はリントール28(9・15・19・15・3 七五年)に記されている。この女性はリントール28のほか、53、32、石碑11にも生起するが、共通する文字は「空」(T561)である。この女性は楯ジャガーの妻であると同時に、鳥ジャガーの母である。それは、これまた母―子の関係を表わす文字が石碑11にてでることからわかる(図91の左端)。そうすると、楯ジャガーが死に、鳥ジャガーが即位するまでの約一〇年は、王位継承者であるはずの息

子、鳥ジャガーに、王位がすなりゆずられなかつたということになる。

鳥ジャガーのほうには同時期に少なくとも二人の女性(妻)がいた。一人はイック、もう一人はイシュという日の文字をそれぞれの名前を表わす文字群にもっている(図92)。女性イシュが現われるリンテル17のFには、ティカルの紋章が生起している。イシュはティカルから嫁いできた女性であろうか。鳥ジャガーに関する女性はほかにもいる。きつと一夫多妻であったのだろう。

これまで、ピエドラス・ネグラスとヤシユチランの王朝についてみてきた。これからもおなじような方法で、パレンケ、ティカル、ナランホ、キリグア、コパンといった、重要な遺跡をみていく。その記述は、それぞれまず歴史的概略を述べ、そこから適当なところをとりあげる、という方法をとった。つまり個々の遺跡をそれぞれの時間にそって述べていくわけであるが、それは横のつながりがありあまりよくわからず、マヤ世界を全体的にとらえにくいかもしれない。そこで一番最後に、マヤ文明の絶頂期である七〇〇年頃の世界をとりあげてみることにする。先に述べるやり方は、いかなれば縦の糸、後で述べるやり方は、横糸とみることもできよう。そうして織られたマヤの歴史像はいかなるものになるか、まずはつづけてみよう。

パレンケ

シエラ・デ・チアパスの北斜面の森のなかの、ほんの少しの平坦地にパレンケはある。これま

で述べてきた二つの遺跡に比べると、パレンケは、私たちにをはるかに近づきやすい遺跡であり、またよく整備されている。

パレンケの歴史は、土器の分析からは古典期前期の初期、さらには原古典期までさかのぼることができ、9・10・0・0・0（六三三年）以前は、弱小都市にすぎなかった。しかしそれ以後急激に成長し、9・13・0・0・0（六九二年）にかけて絶頂期を迎える。遺跡の中心にある「宮殿」や「碑文の神殿」、十字グループと呼ばれ、たがいに密接な関係にある、「十字の神殿」、「葉の十字の神殿」、「太陽の神殿」の三つの神殿などの重要な建物は、この頃のものである。それらはパカルとチャン・バールムという二人の王によって築かれた。ところが9・17・0・0・0（七七一年）以後、パレンケは急速に衰退してゆく。そして八二〇年までには完全に放棄されてしまう。

パレンケのテキストはいくぶん趣きを他と異にする。材料として選ばれたものは、ほかの遺跡と異なり、建築装飾の一部となったパネルやスタッコーであった。「碑文の神殿」や十字グループの神殿などのパネルには、美しい像とともに多くの文字が刻まれている。それらは歴史的事柄に加え、神話や宗教的情報を伝えている。テキストの分析は進み、王朝史はいうにおよばず、マヤ紀元零年頃の神々の理解も深まってきている。

再構成された王朝は、カワックー王の誕生（四六五年）からクック王の死（七八三年）までの三

〇〇年以上におよぶ。ただしテキストは、パカル王（在位六一五～六八三年）以後のものに限られる。それ以前の王朝は、おもに「十字の神殿」のテキスト（六九二年）から再構成されたものである。

パレンケは芸術的美しさでマヤの遺跡のなかでも際だっている。自然主義的な描写、形や配列の美しさ、繊細な線など、一目でパレンケのものと思われるくらいである。またここは、マヤ世界で初めて神殿下に墓が見つかったところとしても有名である。「碑文の神殿」下でみつかったその墓は、パレンケを隆盛に導いたパカル王のものともみられている。ところが、碑文の解説から導きだされたパカル王の死亡年齢は八〇歳であるのに対し、骨から調べられた推定年齢は四〇から五〇歳で、大きな開きがある。しかしパレンケの碑文は、ハインリッヒ・ベルリンやデイビッド・ケリー、さらには最近催された三回の円卓会議における多数の学者の研究により、かなり理解されるようになった。

いま述べた一例からでもわかるように、碑文の分析から再構成された歴史にはいくつかの矛盾がある。解釈に矛盾が生じる原因としては、ヤシュチランと同様、カレンダー・ラウンドによる日付が多いために、長期暦上のいつにあたるかはっきりわからないことや、日付の表記法が特殊なこと、鍵となる文字がいかなる意味をもつかかわらないことなどがあげられる。その顕著な一例として、「碑文の神殿」下の墓の蓋の側面に記された五四文字からなるテキストをみてみよう。



1 8アハウ 2 13ポプ 3 誕生 4 6エツナツプ 5 11ヤシュ 6



7 死? 8 パカル 9 パレンケ 10 11 12

図93 蓋の南側面の文字群 (M. Greene Robertson 画)



16 5カーパン 5マック 17 死? カワック I

図94 蓋の東側面の文字群の一部 (M. Greene Robertson 画)

石棺の蓋の四側面に刻まれたこのテキストは、一三の日付をもち、全部で五四文字からなる。パカル王とその祖先を扱ったものとみられるが、その解釈はなかなかむずかしい。

テキストは南側面の左端からはじまる(図93)。最初に、8アハウ13ポプ、その次に誕生文字、そして、ふつうなら誕生文字の次に名前が生起するところだが、いきなり6エツナツプ11ヤシュの日付がきている。そしてその後ろにパカル王の名、パレンケの紋章文字がつづく。これだけでは意味をとりがたい。また二つの日付が長期暦上のいつにあたるかわからない。しかし幸いなことに、8アハウ13ポプは宮殿C棟の階段碑文にイニシャル・シリーズで与えられ、その日の次には誕生文字、パカル王の名、パレンケの紋章文字とつづくので、どちらも9・8・9・9・13・08アハウ13ポプ(六〇三年)であり、パカル王の誕生した日であることがわかる。8アハウ

13 ポプと誕生文字、パカルの句は、「碑文の神殿」の西側パネル E2～F3 やパサデナ板の A1
と A2 にもあり、確実である。

もう一つの 6 エツナツプ 11 ヤシュの日付は、宮殿板（ルス I 板）の J9～I10 や「碑文の神殿」
の西側パネルの T5 にもあるが、カレンダー・ラウンドの日付のみで、それだけをとりだしたの
では、一八九八〇日ごとに繰り返されるので、長期暦上のいつにあたるのかわからない。しかし、
「碑文の神殿」の西側パネルの T6 と S7 には、ディスタンス・ナンバーとして 4・1・10・18
がある。9・8・9・13・0 8 アハウ 13 ポプから数えると、9・12・11・5・18 6 エツナツ
プ 11 ヤシュになることがわかる。また宮殿板の 6 エツナツプ 11 ヤシュも、計算から 9・12・11・
5・18 であることがわかるので、その日であることはまちがいない。宮殿板では、この日の次に、
プロスクリアコフが死を表わすとした文字がつづくので、この日 6 エツナツプ 11 ヤシュは、パカ
ル王の死亡した日と考えることができる。この日がほんとうに王の死んだ日だとすると、パカル
王はじつに八〇年（4・1・10・18）も生きたことになる。そうすると、棺内に残っていた骨の分
析からだされた推定死亡年齢（四〇～五〇歳）とあわなくなる。

碑文の解釈と科学的データのこのくい違いは、いったいなにに起因するのであるらう。「碑文の
神殿」下の墓に残っていた人物がパカルでないならば問題ない。しかし常識的にいって、その考
えは受けいれられない。なぜなら、この骨は、碑文が扱っている王に捧げられた神殿の下の墓か

らみつけられた骨であるからだ。それでは碑文の解釈のほうにまちがいがあるのだろうか。しかし現在のところ、碑文から導きだされたパカル王は八〇歳の寿命であったというこの解釈に替わる案はない。

6 エツナップ11ヤシュが死亡した日とみられたので、その日のあとに生起する図93の7の文字は死を表わすにちがいない。この文字は、それにつづく文のなかの、王の名前を表わす文字について九回もでてくる。そして各々その前には、カレンダー・ラウンドの日付が生起する。いま述べた解釈に従うと、カレンダー・ラウンドの日付は、それぞれの王の死亡した日となる。その例は東側面にある16、17番目の文字である(図94)。5カーバン5マック、問題の文字、カワックI王と書かれている。この日は、長期暦上の9・4・10・4・17(五二四年)にあたると考えられる。

カレンダー・ラウンドの日付しか記されないのに、それがどうして長期暦上の日が9・4・10・4・17と定められたかという点、石棺の蓋のテキストに全部で一三ある日付の、6番目と11番目の前にあったT644がもとになった。これはハアブ(年を表わす。T528)と「着座の文字」(T644)が融合した文字で、年の終りを示す。それで6番目の日9・7・0・0・0・7アハウ3カヤップ(五七三年)と11番目の日9・10・0・0・0・0 1アハウ8カヤップ(六三三年)が定められた。テキストの日付は順に並んでいるものと仮定すると、3番目から5番目の日付は

6番目の日(五七三年)より前、それ以後11番目までは五七三年から六三三年のあいだの長期暦上の日を選ばれる。そして11番目以降のカレンダー・ラウンドの日付は、六三三年よりあとの日となる。こうして、カワツクI王をはじめとするパカル王の先祖九人の死んだ日が導かれた。

しかし、こうした解釈だけでは正しいかどうか分からない。それを裏づける証拠は、「十字の神殿」のパネルの右半分のテキストにあった。すべてを分析することはできないので、先にとりあげたカワツクI王の部分だけをとりだしてみよう(図95)。

1・16・7・17 (R8) (R9) — 誕生 (S9) — 5アハウ3セツク (R10) (S10)
 — カワツクI (R11) — 即位 (S11) (R12) — 5カーバン0ソツツ (S12) (R13)
 となっている。いままで学んできた語順とかなり違っており、なにを表わそうとしたのか、理解することはむずかしい。しかし、これは下に記したように解釈すると矛盾がなくなる。

カワツクIの次の王ホック(カンシユルI)は、9・4・14・10・4 5カン12
 カヤツプ(五二八年)に即位している。それゆえ、棺の蓋の日9・4・10・4・17
 5カーバン5マツク(五二四年)をカワツクIの死亡した日とみてなんらおかしく

(9・1・10・0・0) 5アハウ3セツク (誕生) 465年

1・16・7・17

(9・3・6・7・17) 5カーバン0ソツツ (即位) 501年

ない。四年間も王がいないことになるが、ヤシュチランの楯ジャガーから鳥ジャガーに交代する
とき一〇年もあいていたことを考えると、問題はあるまい。

「碑文の神殿」の下の墓の石棺の蓋や「十字の神殿」のパネルのテキストなどから、こうして、
パカル王に先だつ、カワツクⅠ、ホックⅠ（カンⅡシュルⅠ）、カワツクⅡ、パールム、イック女
王、アークⅡカン、サックⅡクック女王の誕生や即位や死亡の日が決定された。

パカル王は、9・8・9・13・0 8アハウ13ポプ（六〇三年）に生まれ、一二歳のときに即
位し、9・12・11・5・18 6エツナツプ11ヤシュ（六八三年）に死亡した。六八年も在位し、
パレンケを繁榮に導き、八〇歳で死亡した。そして死後、「碑文の神殿」下の墓に埋葬された。

パカル王の次の王は、チャンⅡパールム王であった。パカル王が死んで一三二日後に、即位し
た。四八歳であった。そして六六歳で死んだ。チャンⅡパールムは、パカル王とアフⅡポーⅡへ

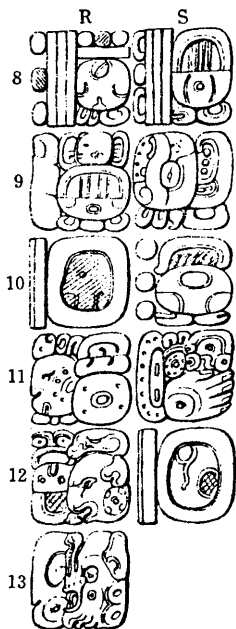


図95 (A.P.Maudslay画)

ルとあだ名されている女性のあい
だに生まれた子であった。

パカル王以後の王、チャンⅡパ
ールム、ホックⅡ（カンⅡシュル
Ⅱ）、チャーク、チャツクⅡスツ
ツ、クツクとあだ名されている王

チャン＝パールム



誕生	9・10・2・6・6	2キミ19ソツツ	635年
即位	9・12・11・12・10	8オック3カヤツプ	683年
(死)	9・13・10・1・5	6:チクチャン3ポブ	701年)

ホックII(カン＝シュルII)



誕生	9・10・11・17・0	11アハウ8マック	643年
即位	9・13・10・6・8	5ラマツト6シュル	701年
(死)	9・14・9・14・15	9メン3ヤシュ以後	719年)

チャーク



誕生	9・12・6・5・8	3ラマツト6サック	678年
即位	9・14・10・4・2	9イック5カヤツプ	721年

チャック＝スツツ



誕生	9・11・18・9・17	7カーバン15カヤツプ	670年
即位	9・14・11・12・14	8イシュ7ヤシュキン	722年
(死)	9・15・0・0・0	4アハウ13ヤシュ以後	731年)

クック



即位	9・16・13・0・7	9マニック15ウオ	764年
(死)	9・17・13・0・7	7マニック0パシュ以後	783年)

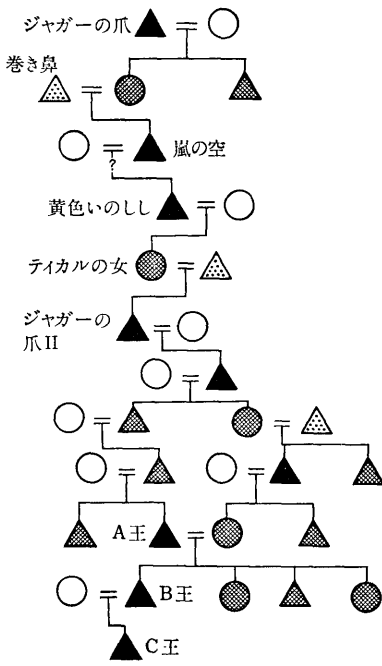
図96

私たちは、十字グループのパネルや「宮殿板」や「九六文字の碑文板」などから同定されている。それらの王の誕生や即位などはどうして得られたかを述べることも興味深いことであるが、ここでは、誕生や即位や死亡した日を記すだけにとどめておこう(図96)。

ティカル

ティカルは、マヤ文明の栄えた地域のほぼ中心に位置し、社会的にも文化的にも文字どおりマヤ世界の中心であった。

ティカルの王朝についても、



■ 王位継承権をもつ者 ▨ 王 ■ 継承王

図97 ティカル王朝の系図

研究はかなり進んでいる。たとえば、クレメンシー・コギンズは、碑文からばかりでなく、発掘された多数の墓からの情報を考慮に入れ、次のような王朝の系図をこしらえた(図97)。このような系図は碑文の研究からだけではとても得られない。というのも、碑文の量は限られているからである。それゆえ、碑文を理解するためには、ほかのいろいろな情報を活用する必要がある。この場合、墓から得られた土器や骨などの埋葬品からの情報をもとにしているのだが、これは一つの新しい研究の方向を示したものといえよう。この系図は正しいとはいきれないが、将来修正

されることがあっても、ごくわずかであろう。それゆえ、これをもとに考えると、ティカルでは、王族の世襲により王朝が維持されていたということがができる。

十二代のうち九代が世襲の男の王であった。世襲すべき男の後継者がい

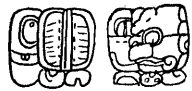


図98 A王

ない場合は、娘に婿をとることで補った。おそらくその婿たちも、ほかの王家、または貴族階級から選ばれたのであろう。貴族層はティカルの場合では、紀元前には出現していたことが骨の分析からも確かめられている。りっぱな墓から出土した骨は、そのほかの骨より大きかったのである。栄養状態がよかったためであろう。

ティカルの王朝を系図に従い、碑文からたどることは興味深い仕事であるが、ここでは、古典期後期の繁栄をもたらしたA王を中心に考えてみることにしよう。

A王(図98)は、9・12・9・17・16 5キップ14ソツツ(六八二年)に即位した。彼は古典期前期の繁栄を築いた「嵐の空」王の即位からちょうど13カトゥン後に即位している。13カトゥンはちょうど短期暦の一周期にあたる。マヤ人にとって重要なその一周期に即位の日をあわせたことはまちがいない。

A王は、西方ドス・ピラス方面からティカルにやってきたと考えられている。ドス・ピラスでは、ティカルの王「マッコーを捕えた人」が六七九年または六八二年に、階段碑文に勝利を刻んでいるという。ドス・ピラスの階段碑文のテキストはまだ刊行されていないので、この「マッコーを捕えた人」がA王なのか、それともその父なのか、だれなのかわからない。テキストが刊行されるまで残念ながらはっきりいうことはできないけれども、少なくともA王の即位前後に、ドス・ピラスでティカルの王が勝利を刻んだことはまちがいないようである。ドス・ピラスは、グ

アテマラ高地との通商を可能にしたパシオン流域の要衝である。そこをおさえる必要があったのであろう。

このように考えると、ティカルとワシヤクトゥンのあいだにみつかった堀の意味もよくわかる。ティカルの北方、歩いて五時間ほどのところにワシヤクトゥンがある。ワシヤクトゥンは、歴史がはじまって以来、ティカルに勝るとも劣らない都市であった。そのワシヤクトゥンへ向かって徒歩で一時間、約四・五キロのところ、深さ三メートル、幅三・六メートル、全長九・五キロの堀が一九六七年にみつかった。これはワシヤクトゥンの脅威に備えた防堀ではないかと考えられる。この堀は六〇〇〜七〇〇年のものだという。つまり、A王が即位する前後に築かれたものである。一九六七年以後、ティカルの南側にもおなじような防御システムが発見されている。南北の防御を固める必要があったのだろう。西はドス・ピラスの征服、南北は防御堀の築造で対処した。それでは東はどうか。東は、A王の即位から一一六日後に、ナランホに女性を送ることで対処している。

こうみてくると、次のようにいえよう。五五〇年頃から目立った活動のなかったティカルは、A王の即位によってはじめて四方の防御を固めて、13カトゥン前に「嵐の空」王が築いた繁栄を、ふたたび謳歌することになった。おそらく遺跡の中心にある神殿Ⅰ、ⅡはA王によって建てられたものであろう。コンプレックスNも建物5D-33も彼の手になる。

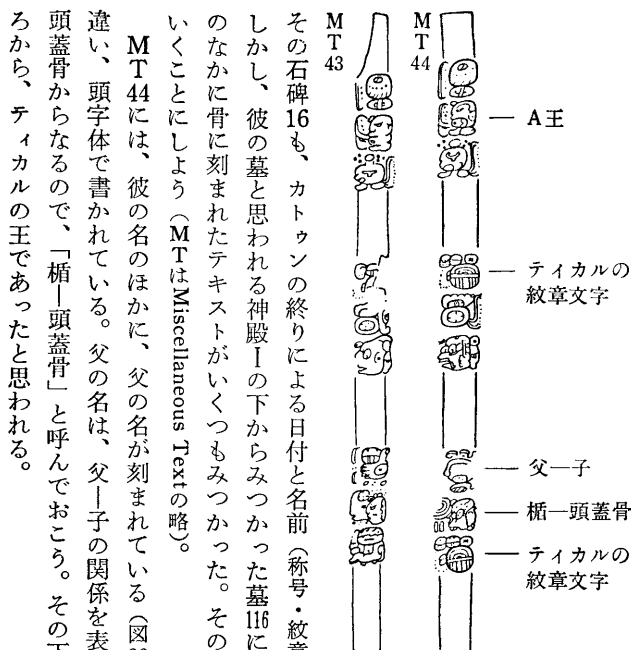


図99 骨に刻まれたテキスト
(A. Seuffert 画)

その石碑16も、カトゥンの終りによる日付と名前(称号・紋章文字)の短いテキストでしかない。しかし、彼の墓と思われる神殿Iの下からみつかった墓116にはおびただしい副葬品があった。その骨のうちのひとつ、MT44をまずみていくことにしよう(MTはMiscellaneous Textの略)。

MT44には、彼の名のほかに、父の名が刻まれている(図99)。ここではA王は通常の文字とは違い、頭字体で書かれている。父の名は、父—子の関係を表わす文字の下に記されている。楯と頭蓋骨からなるので、「楯—頭蓋骨」と呼んでおこう。その下にティカルの紋章文字があるところから、ティカルの王であったと思われる。

王はたくさん建物をたて、それまでにない繁栄をティカルにもたらした。しかし、A王は、自分のことを記念碑に刻むことはあまり好まなかったようである。彼のことは、

わずかにリントル3(神殿I)と石碑16にみえるのみである。

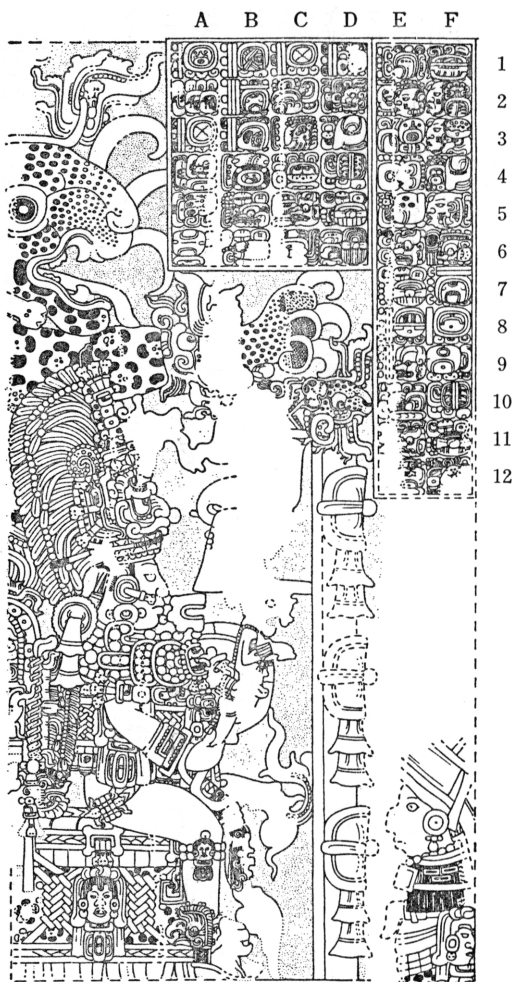


図100 神殿Iのリンテル3 (W. Coe 画)

MT 44とそっくりなのがMT 43である。こちらも九文字からなり、違いは最後の三文字でしかない。この部分はMT 44が父の名を表わしていたのに対し、母の名を表わしている。つまり、MT 43と44は一对のテキストとなっている。

MT 43と44に刻まれていたA王の父と母の文字は、A王の主テキストである神殿Iのリンテル3にもみることができ(図100)。リンテル3は、9・13・3・0・0 9アハウ13ポプ(六九五)年にはじまり、全部で四八文字からなる。最初の日9アハウ13ポプは、次でみるナランホのテキストにも記され、その日に関することを述べる文字もおなじ文字である。おそらくナランホとともになにかを祝ったのであろう。それから7・18(一五八日)後の11エツナップ11チェンのこと、さらに四〇日後の12エツナップ11サックのことが記され、最後に、A王が9・12・9・17・16 5キップ14ソツツに即位したことが記されている。11エツナップ11チェンの日に関する文字には、楯の文字がみられ、またカラクムル(?)などの紋章文字がみられるところから、軍事的な征服か、あるいはなにかそれに類する出来事を記したものと思われる。四〇日後の12エツナップ11サックの日には、儀式を表わす魚をつかんだ手の文字や舌に穴をあける儀式を表わす文字がみられるところから、四〇日前の出来事に対する儀式を記したものと考えることができる。

その12エツナップ11サックに関する文の一節、E1からE7までの節に、MT 43と44で同定できた父(F6)と母(F3)の文字をみることができ。父・母―子の関係を表わす文字はないものの、構造的には、これまでみてきたのとおなじ形の、子―母―父となっているのでまちがいない。ここで同定できたA王の父「楯―頭蓋骨」は、ドス・ピラスの階段碑文No.2にも生起するという(六六二年)。彼こそが「マツコーを捕えた人」なのかもしれない。

祭壇5には女性の名がみられる。祭壇5はA王の像を刻んだ石碑16と対になって用いられているので、この女性はA王の妻とみなすことができる。しかしそうであるとする、矛盾が生じてくる。というのは、図77でみた石碑5にはB王の父と母が刻まれている。父はA王であるので、母は当然A王の妻である。祭壇5に刻まれている女性がA王の妻であると、石碑5に刻まれているその女性とおなじでなければならぬが、文字が異なるからである。これはどういうことであろう。これまでみてきたことから、この石碑5の解釈はまちがいに思われる。そうすると、祭壇5のほうの解釈がまちがいであろうか。それともA王のもう一人の妻であらうか。石碑16と対であっても、祭壇5に刻まれている女性の名をかならずしもA王の妻とみなす必要はないので、わからない。祭壇5のテキストは十分に理解されているとはいいがたい。もう一度検討しなおす必要がある。

A王への言及は、墓116の骨のテキストを除くと、9・14・0・0・0(七二一年)以後はない。しかし、A王はさらに二三年ほど生存していたように思われる。というのは、B王の即位は七三四年であるが、そのあいだにほかの王がいたという証拠はないからである。

B王はA王の子でもある。それは、父―子、母―子の関係を表わす文字を検討するときにとりあげた石碑5(図77)に記されている。

その次はC王で、七六八年に即位した。C王はB王の子であることは、即位を記した石碑22に

刻まれている。ティカルの王朝はC王以後はわからなくなる。石碑24や11など、石碑は八六九年まで建てられているが、破損していたり、風化しているため、同定されていない。

ナランホ

ナランホでは、石碑はほぼ一〇年ごとに建てられている。しかし、六五二年から六九二年まで、七三一年から七七一一年までのあいだは、石碑は建てられていない。この空白期があることで、ナランホの王朝は、三つのシリーズに分けることができる。石碑の奉納日（石碑に刻まれた最後の日）で各シリーズの期間を示すと次のようになる。

シリーズⅠ 9・8・0・0・0（五九三年）～9・10・10・0・0（六四二年）

シリーズⅡ 9・13・3・0・0（六九五年）～9・14・15・0・0（七二六年）

シリーズⅢ 9・17・10・0・0（七八〇年）～9・19・10・0・0（八二〇年）

シリーズⅠは三人の王、シリーズⅡは二人、シリーズⅢは三人の王がいた。ナランホの各シリーズはそのほかの都市からの影響が深く、シリーズⅠはカラコル、シリーズⅡはティカル、シリーズⅢはマチャキラーの碑文と共通する文字をもっている。各シリーズがこれらの都市といかに関係があったか、たとえば、カラコルを例にとって示してみよう。カラコルの石碑3には、たかさんの日付が刻まれているが、そのうち次の二つの日付にはよく知られている誕生文字がつづく。



図101

9・6・12・4・16 5キップ14ウオ
 9・7・14・10・8 3ラマツト16ウオ

誕生した人物を王Ⅰ、王Ⅱとすると、年齢差は約二二年で、両者は親子の関係であったと推測できる。王Ⅰは9・9・5・0・0頃まで、王Ⅱは9・10・0・0・0頃まで支配の座にあった

と推定されているが、じつは王Ⅱがナランホのリンテル1にも記されているのである。ナランホのシリーズⅠには三人の王（かりにIa、Ib、Icと名づける）がいたが、Ib王がカラコルの王Ⅱと同一人物と考えられるのである。おなじ誕生日であるし、名前も一致するし、活躍した期間も一致するからである。

ナランホでもっとも興味深いのはシリーズⅡである。そこで、シリーズⅡを簡単にとりあげることしよう。

シリーズⅡには少なくとも一四本の石碑があるが、そのうち四本に女性が刻まれている。これら四本は、男性の像を刻んだ石碑と対になって建てられている。

その一つ石碑24は、前面に女性の像が描かれ、裏面には9・12・10・5・12 4 エップ10ヤシュ（六八二年）ではじまるテキストが刻まれている。シリーズⅡの最初の日である。この日は石碑24のほか、石碑3や29でもイニシャル・シリーズで与えられている。よほど大事な日であったにちがいない。おそらく石碑の前面に描か

れている女性がティカルからナランホへやってきた日なのであろう。どうしてそのような推測ができるかという点、この女性を表わす文字には、ティカルの紋章文字がついていること(図101)、よく知られている誕生文字や即位文字がこの女性に關してはないことからである。

この日はティカルのA王が即位して一六日後である。おそらくA王が東の脅威に對処するため、娘かA王に近い女性をナランホへ嫁がせたのだらう。というのも、この女性の名にはたえずティカルの紋章文字が生起しており、あたかも自分の出身地、ティカルを誇っているかのようであるからだ。また、先に図100でふれたティカルの神殿Iのリンテル3の最初の日とおなじ日が、石碑29に記され、おなじ文字がつづく。さらに1カトゥン後にもそれを記念していることから、ティカルの王家につながる人物であるはずがない。A王に近い人物でなければそうするはずはないからだ。

このティカルからきた女性の像は、石碑3、24、29に刻まれている。女性が石碑の正面に刻まれることはめずらしく、この女性がナランホでいかに絶大な権力をもっていたかがわかる。これに反し、彼女の夫は碑には描かれていない。彼女の夫となった人物は、ティカルというあまりに強大な権力のまえに小さくなっていたのであろう。ナランホはそれまではとるにたらない小さな町であったが、ティカルの防衛政策にくりこまれ、ティカルの女性を嫁にもらったため、大きな町に発展したと思われる。



図102



図103 ひげリス王

ナランホを第二の繁栄に導いたこの女性への言及は、9・14・3・0・0（七一年）までつづいている。もっともこの日は、9・13・3・0・0（六九五年）の1カトゥン記念日であるので、9・13・3・0・0頃までといったほうがよい。9・13・3・0・0という日は、ティカルの神殿Iのリンテル3（図100）の最初の日とおなじで、その日の出来事を示す文字もおなじである。ティカルとナランホが共通に祝った儀式と思われる。

ティカルの女性の両親と思われる文字が石碑24のE7からD13の節に現われている。父親と思われる文字は図102の文字である。先に、ティカルからやってきたこの女性は

ティカルのA王の娘、または縁者といった。しかし、父を表わすとみたこの文字は、A王の文字とはだいぶ違い、同一人物とは思えない。

父—子の関係を表わす文字（左端の文字）があることから、ティカルの女性の父親にまちがいないと思われるが、そうすると、ティカルの女性はA王の娘ではなく、A王の縁者、ティカル王家の一員の子ということがができる。ナランホの石碑24に現われるティカルの紋章文字をもったこの人物は、ティカルの王家の象徴である「空」の文字（左から三番目の左半分の文字）をもっているので、ティカル王家の一員とみ

られるが、残念ながらティカルの碑文中には現われないので、A王とどのような関係なのかわからない。

ティカルの女性はナランホへきて五年後に子どもを生んでいる。その子「ひげリス」は、9・12・15・13・7 9 マニック0 カヤップ(六八八年)に誕生した(図43)。女性の像を刻んだ石碑と対になって建てられた碑は彼を描いている。「ひげリス」はナランホ土着の家系とティカルの家系の両方をひいた子であるが、その表わす文字からは、ティカル王家の子孫であることをより誇っていたように思われる(図103)。というのは、「空」の文字はティカル王家の象徴であるが、彼の名にはたえずその「空」の文字がつくからである。

ひげリス王は9・13・18・4・18 8 エツナップ16 ウォ(七一〇年)に結婚した。相手はティカルの女性であった。この女性は石碑31に描かれている女性と思われるが、その碑文の風化ははげしく、ティカルの女性ということ以外はわからない。

ひげリス王は、9・14・15・0・0(七二六年)の日を刻んだ石碑18でも言及されているのかもしれない。しかしその石碑、さらにそれより5トゥン前の石碑28、31とも風化がはげしく、テキストの判読は不可能である。シリーズⅡはこの日をもって終る。ひげリス王はわずか四〇歳たらずである。外来の襲撃にたおれたのであろうか。

ティカルのA王についての石碑は9・14・0・0・0でとまる。その子B王が即位するのは

9・15・3・6・8（七三四年）であり、二三年の空白がある。そのあいだの事情はよくわからないが、この空白期は、ナランホのシリーズⅡの終焉となんらかの関係があるにちがいない。この期間になんらかの混乱がおこった。そのため、ティカルでは二三年の空白期間が生まれ、ナランホではシリーズⅡの滅亡となったのであろう。

キリグアとコパン

キリグアとコパンは、直線距離で約五〇キロしか離れていない。マヤ地域の南東部の二大中心地であり、たがいに交流があった。彫刻様式やデザインが似ているし、碑文には共通する日や類似する節がある。最初、キリグアはコパンの影響下にあった。たとえば、キリグアがコパンから得たものの一例として、むしろ（ポプ）の織りをかたどった碑をあげることができる。コパンでは七〇二年にその石碑Jが建てられているが、キリグアでは約五〇年後の七五一年に、むしろ織りの石碑Hが現われている。コパンの石碑Jを模倣したことはまちがいない。

力関係は時代とともに変化する。最初コパンの影響下にあったキリグアが、やがてコパンから独立し、モタグア流域の支配権を獲得する。そのあたりを碑文からみてみよう。

コパン、キリグアとも五世紀の後半には石碑を建てているが、王朝史としてたどれるのは、コパンでは五六四年から、キリグアでは七二五年からである。これまでのところ、コパンでは六代

の王、キリグアでは五代の王が同定されている。しかし、すべての王が確実に同定されているわけではない。たとえばキリグアでは、第三代と第四代の王は、いたかどうか疑問である。これはテキストがむずかしいことや、それらの王に関するテキストが少ないことが原因である。

コパンやキリグアの碑文は、他都市の碑文とだいぶ趣きを異にしている。ひとつの文字ます、多いときには四つも五つも文字がつまこまれていて、それだけでむずかしい印象を受ける。実際テキストを分析しはじめると、多くの日は歴史的事柄よりも儀式的事柄に関係しており、王朝史の解明が困難であることがわかってくる。またペテン中心部の碑文と比較すると、異なった文字がたくさんあることがわかる。おそらくこれは方言的な差によるのであろう。そのため、ペテン中心部の諸都市の碑文の研究からわかったことが適用しにくい。

このようにコパンやキリグアのテキストには、これまでにみなかった障害がある。同定されている王たちも、ペテン中心部のものと比べるとはるかに問題が多い。碑文はまだ十分に理解されてはおらず、これから述べることには多くの推論がはいっている。

コパンで一番多く言及されているのは、王Ⅲと王Ⅳで、それぞれ、18ジョッグとヤシュユマツコーとあだ名されている。キリグアでは王Ⅰである。多く言及されているので、ほかの王たちと比べるとたしかであるが、誕生や即位などをとりあげると、すぐさま問題がでてくる。これらの王はほぼ同時代であるので、彼らの時代をとりあげてみよう。



図104 王18ジ
ヨグ



図105 王I



図106



図107

コパンの第三代の王18ジヨグ(図104)は、9・12・4・3・14(六七五年)に誕生し、9・13・10・0・0(七〇二年)頃に即位したと考えられている。しかしいずれも、誕生文字や即位文字によりはっきり確かめられているわけではない。

キリグアの王I(図105)は、9・14・13・7・17 12カーパン5カヤップ(七二五年)に権力を得たと考えられている。その日の出来事を示すのは図106の文字である。しかし、この文字を誕生文字と考える人もいる。コパンやキリグアのテキストの分析はこのようなもので、まだまだ問題が多い。

キリグアの王Iが権力を得て一三年後、キリグアにとって、そして少なからずコパンにとっても重要な出来事がおこる。この日の出来事は図107の文字で表わされているが、斧があるところから、襲撃に関する文字ではないかと考えられている。つまり、この日9・15・6・14・6 6キミ4セック(七三七年)は、キリグアの王Iがコパンを襲撃し、コパンの王18ジヨグを捕えた日と考えられている。というのは、この日は、コパンには一度だけ現われるのに対し、キリグアでは少なくとも四度現われている。つまりコパンにとってより、キリグアにとって重要な日であるからだ。また、コパンでは9・15・5・0・0を最後に、二〇

年の空白期間が生じているからである。キリグアはこの勝利により完全に自立した中心地となった。そして急に建築活動が盛んになってくる。

そのところを少し別の観点から推測すると、次のようになる。キリグアは紋章文字を9・15・0・0・0（七三一年）にもった。つまり、自立した。その日から9・19・0・0・0（八一〇年）まで、五年ごとに石碑を建てる習慣がはじまった。繁栄しはじめたのであるが、モタグア流域を支配するには一つの関門があった。それはコパンである。コパンを打ち砕く必要がある。そのため、9・15・6・14・6にコパンを攻撃し、勝利した。コパンのきずなから解き放たれ、キリグアはモタグア流域の通商路の支配権を得た。そこは、グアテマラ高地とカリブ海をつなぐ、黒曜石とひすいの交易路である。それをにぎれば富がもたらされる交易路であった。

キリグアでは、9・14・13・7・17（七二五年）と、9・15・6・14・6（七三七年）は、繰り返し言及されている。上で推測したような日であったかは別としても、ひじょうに重要な日であったことはまちがいない。しかし、それはのちの碑において言及されているにすぎない。すなわち、約二〇年（七五六年）から約五〇年（七八五年）後に建立された石碑においてである。石碑は五年ごとに建てられているので、これは不思議である。また、コパンでは、9・15・6・14・6の日のことが一度であるが、記されている。負けた不名誉な日を記すことがあるのだろうか。そのような疑問もわいてくる。

9・16・12・5・17 6カーバン10モル(七六二年)には、コパンで第四代の王ヤシュユマッコーが即位する。キリグアではまだ王Iの時代である。このヤシュユマッコーに関する碑は、18ジヨッグ王よりはるかに多く、コパンが一番栄えた時期といえる。だが、ヤシュユマッコーとキリグアの王Iの関係もわからない。

キリグアの王Iは、9・17・0・0・0(七七一一年)になると、マヤ世界でもっとも高い石碑E(約一〇メートル)を建立する。そして約六〇年の在位ののち、9・17・14・13・0(七八四年)に死亡したとみられている。

これまでキリグアとコパンの碑文をみたわけであるが、テキストがむずかしく、推論が多かった。本論で行なった推論にもいくつかの疑問がわいてきて、かならずしもすっきりしたものになっていない。まだまだ研究の余地がある。

横のつながり

さて、これまでおもだった遺跡の個々の王朝史をみてきたわけだが、各王朝は独立に存在していたわけではない。横のつながりがあった。ティカルとナランホの関係やコパンとキリグアの関係などについては少しふれたが、もうすこし広い視野に立ってマヤ社会をみることも必要ではなからうか。

考古学的には、たとえばメキシコ高原のテオティワカンの土器がティカルに現われることから、テオティワカンとティカルとの関係が推測されているように、いろいろな都市間の関係が推測されている。私たちはこれまで碑文をみてきたのであるから、碑文からマヤ社会がどのようなものであったかをみたいものである。

各都市間の関係を知るもっとも頼りになる文字は、五章でみた紋章文字である。ある都市の紋章文字がほかの都市の碑文中に生起することで、その二つの都市に関係があったことがわかる。たとえばある都市の紋章をもった女性が他都市に現われると、両都市間にその女性を媒介とする、たとえば嫁入りのような関係があったと推測できる。都市間の関係はまだ推測の域をでないものがほとんどであるが、結婚や征服など、都市間の関係を物語る文字はいくつか同定されている。私たちはマヤ文字の研究から、ある程度マヤ社会をとらえることができるようになった。まだこれからの仕事といえるが、ひとつ碑文の研究からわかったことをもとに、七〇〇年前後のマヤ社会をとりだしてみよう。

マヤ社会の中心は、なんとといってもティカルであった。ティカルの王の名には「空」(T56 1)の文字がついてでることが多い。これはおそらくティカルの王家の象徴であろう。この「空」の文字をもった人物は、ヤシュチランやコパンやナランホなどに現われる。「空」の文字とティカルの紋章文字を手がかりに、ティカルとほかの都市との関係をみてみよう。

ティカルでは六八二年にA王が即位した。即位後一一六日目に、王家の女性をナランホへ送っている。彼女はそこに嫁いだのであろう。五年後に、のちに「ひげリス王」となる子を生んでいる。この二人によって、ナランホはこれまでみなかった繁栄を築く。この女性がいかに自分の出身地のティカルを誇り、またティカルといかなる関係をもっていたかは、彼女の名にたえずティカルの紋章がつくことや、9・13・3・0・0という日を共有すること、その日におこった出来事を1カトゥン後にまた記していることなどからうかがうことができる。彼女の名には「空」の文字がついているが、その子「ひげリス王」にも、「空」の文字がついている。おそらく、ティカルの王家につながるためであろう。

ヤシュチランでは、楯ジャガーの治政下である。楯ジャガーの妻の名には、「空」の文字がたえずつく。ティカル王家の象徴と考えられる「空」の文字の存在から、彼女もティカル王家の一員で、ヤシュチランへ嫁いできたと推測できる。次の王鳥ジャガーは、父楯ジャガーの死から即位までの一〇年あまりの闘争に勝利し、即位したと考えられたが、勝利のために、母の出身地であるティカルの援助を必要としたのかもしれない。そうして権力の座についた鳥ジャガーも、ティカルの女性イッシュを嫁にもらっている。ティカルは「空」王家ということができるが、ヤシュチランはいかなれば「ジャガー」王家である。9・4・0・0・0（五一四年）頃のヤシュチランの碑文にも、ティカルの紋章文字が現われており、その頃より両王家は親戚関係にあったと推

測できる。

ピエドラス・ネグラスでは、第三シリーズの王の治政下である。この王は碑文からみるかぎりでは直接ティカルと関係をもたなかったようだ。しかし、第四シリーズの王は関係があった。彼は七〇一年に生まれ、七二九年に即位している。

ピエドラス・ネグラスのリンテル3は、9・15・8・3・13（七三九年）から9・17・11・6・1（七八二年）までの約四三年間の出来事を扱っている。おもな内容は、第四王の即位1カトゥン記念と、彼の死である。描かれている主題は、おそらく、第四王の死に伴う次の王の即位に関する集まりであろう。中央の台座に坐る人物が、台座の下に坐っている七人の人物になにかを語りかけている。そして台座の両わきに三人ずつ人物が立っている。右の立っている人物の下には一〇の文字がみられる。そのうち最後の四文字は、ティカルのA王の名とその娘を表わす文字（？）である。

右端に立っている人物は、顔の部分が破損していてわからないが、女性であり、その四文字は彼女を表わす文字と思われる。彼女は、おそらくA王の娘で、B王ときょうだいであろう。そして彼女の前に立つ人物は、彼女の子で、のちの第五代の王であろう。碑文からこのように推測できるが、ピエドラス・ネグラスとティカルが強いきずなで結ばれていたことは、ティカルの墓¹⁹⁶の分析からも裏づけられている。

パレンケの七〇〇年頃といえ、チャンロパールムとホックの時代である。ティカルA王の墓の骨のテキスト、MT 42のAとMT 42のBにパレンケの紋章文字があり、A王はパレンケとも関係があったと思われる。捕虜に関係する文字(図108)がパレンケの紋章文字の前につくことから、パレンケのある人物が、捕虜または人質としてティカルにさしだされたのかもしれない。

9・15・0・0・0(七三二年)には、コパンの石碑Aに、コパン、ティカル、カラクムル(?)、パレンケの四つの都市が記されている。おそらく四つの地方の中心地であろう。この頃になると、弱小都市も勃興してきて、マヤ社会はさらに複雑な様相を呈してくる。

簡単に七〇〇年頃のマヤ社会をティカルを中心に見たわけであるが、まだまだわからないことが多い。マヤの古典期の歴史を碑文の分析から体系的に記述することは、いまの私たちにはまだむずかしい。

王たちはなにを碑文に記したか

現在、大遺跡の王たちがいつ生まれ、いつ即位し、いつ死んだかなどの王朝史の基本がようやくわかった状態である。次はそれらの王たちがなにをしたか、なにを碑文に記したかの追究である。小遺跡の碑文の研究も残された課題である。それらについても徐々に解明されてはいる。しかしテキストでわからない文字はまだたくさんある。



図108

テキストの分析をしたこの六章の最後に、これからの研究はどういうふうに進んでいくべきかを考察してみよう。

これまで述べてきた都市の王朝史は、比較的テキストが多かったから、その大筋はわかるようになった。というのも、歴史的解釈の手法は、似た節をとりだし比較検討したり、むすびつくととの関係を考察することにあつた。テキストがたくさんあるということは、ある日のことがなんども言及されたり、王の名などがなんどもでてくるということだ。それゆえ、それらを比較検討することで、問題にした文字が解読できたり、意味が推測できたのである。

マヤには碑文をもつた都市がほかにもたくさんある。しかしその大多数は、テキストの数が少ない。しかもその数少ないテキストも完全なものも少なく、破損していたり、風化していて、読めないものが多い。つまり、判読はできても、ほとんどが一度の生起しかない文字からなるテキストばかりといつてもよい。それゆえ分析がなかなかむずかしいのである。しかし、大遺跡の研究からわかった文字、たとえば、称号や即位や儀式などの一般的なことを表わす文字があれば、それを適用し、また意味はわからないが、なんどもでてくるためなじみとなった文字の分析、適用などを行なっていけば、そのような碑文でも理解は深まっていくであろう。

こういった小遺跡のテキストは整備されておらず、研究しにくい状況にある。大遺跡のテキストでも十分とはいえない。それゆえ研究が十分できるように、テキストの刊行が必要といえる。

そのような要請に応えて、ピーボディ博物館のイアン・グラハムを中心に、写真と手描きを一對にした、すばらしいテキストが刊行されはじめた。一九八〇年までに、ナランホやヤシュチランやシュルトウンなどの遺跡のテキストが、八冊刊行されている。その刊行速度は遅いが、このようなテキストが刊行されているので、刊行とともに、碑文の理解はおおいに進むものと期待される。もっとも、その刊行を待つてばかりはおれない。いままでに刊行されているテキストを十分に活用して研究を進める必要がある。

大都市の碑文は、完全とはいいがたいが、テキストが多く出版されてきたので、研究はおおいに進んだ。そのため、各都市の王朝史はだいぶ理解されるようになった。しかし、大筋がわかった大遺跡でも、テキストを整備する必要があるし、研究すべきことも多い。一九七三年以来、パレンケの円卓会議が三回催されたが、多くの学者が集中的にパレンケの碑文を中心に研究したため、それまでわからなかったことが、たくさんわかるようになった。このような例がある。集中的に取り組むにたえる十分な石碑やリントルをもった都市は、ヤシュチランやコパンなどがある。集中的に研究することで、いままでわからなかったことがわかる可能性は大きい。

とはいうものの、ベルリンやプロスクリアコフによる輝かしい発見以来、今日の状況はいくぶん泥沼におちこんだ感がある。わかった文字といえば、誕生や即位などのごくわずかな文字に限られている。王の名は、本書でふれた六つの遺跡で約五〇ほどである。これらの王は、誕生や即

位のほかになにを記そうとしたのであろうか。私たちに理解できない文字が、碑文にはまだたくさん残っている。それらの私たちにはわからない文字を理解するためには、いったいどうしたらいいのだろうか。

ある都市で生起するわからない文字が、ほかの都市の碑文をみていたら、そこにも生起していることがよくある。総合的な見地から碑文をみることによって、いまはわからない文字がわかるようになる可能性はおおいにある。そうした各都市の碑文を比較した研究は、まだないのである。各都市ごとの研究が一つの壁に達した観がある現在、こうした比較研究こそが、新しい道になるのではなからうか。

比較研究といえば、マヤ文字のもう一つの大きな資料である絵文書を忘れてはならない。本書では、このもう一つの資料ともいえる絵文書にはほとんどふれなかった。というのも、絵文書には歴史的なことが書かれていないからだ。しかしその絵文書も、碑文の理解には欠かすことができない。

絵文書は、一九七一年、ニューヨークのグロリア・クラブで展示された、いわゆるグロリア絵文書をいれると、現在四つある。このうち文字研究に役立つ一番よい資料は、ドレスデン絵文書であり、以下、マドリッド絵文書、パリ絵文書、そしてグロリア絵文書の順となる。扱っている事柄は少しずつ異なるが、基本的には、二六〇日曆にもとづく宗教儀式的占である。金星や月な

どの天文学的なことも記されている。

碑文にも、王朝の歴史ばかりでなく、儀式的なことや天文学的な事柄が記されている。それゆえ、絵文書と碑文の比較研究により、碑文の理解が深まることは疑うべくもない。

絵文書が碑文の研究に役立つ利点がもう一つある。それは、文字の読みに関してである。絵文書の書かれた年代は碑文よりはるかに新しいので、私たちのもっている資料（とくに古典ユカテコ語）により近い。つまり、絵文書のほうが碑文より読みやすい。絵文書でわかった読み方を碑文に適用しない手はない。しかし、絵文書と碑文の文字を比較した研究はまだない。だからもちろん、最初にどれくらいの文字が一致するかを知る必要があるが、絵文書の文字に対して提案された読み方を碑文に適用することで、それまでわからなかった文字が読め、意味がわかるようになる可能性はおおいにある。

小都市の碑文の研究

大都市の碑文のさらなる研究

碑文の総合的比較研究

絵文書と碑文の比較研究

ざっとこういう課題を述べた。これらはいうなれば文字についての研究である。マヤ文字を解くためには、マヤ文字に精通する必要があるが、文字をみておればいいというものではない。そ

のほかの知識がなければならぬ。たとえば、文字のもととなったマヤ諸語の知識である。これの十分な知識がなければ、とても解読などできるはずがない。

マヤ文字を理解しようとすれば、マヤ文明全体を知っておく必要もある。マヤ文字はマヤ文明の一つの側面にすぎないからだ。マヤ文明を知るには、考古学から、民族学から、言語学からといったように、いろいろな角度から研究しなければならない。そうしたいいろいろな面からみたマヤ文明の知識が必要である。

マヤ文明は、メソアメリカという文化領域のほぼ東の端といってもよい地域にある。マヤ文明は、メソアメリカのいろいろな文明の影響を受けつつ発達した文明である。前に、文字Gの解読にメキシコ高原のアステカの知識が必要であったことを述べたことでもわかるように、マヤ文明のみならず、そのほかのメソアメリカ諸文明の広汎な知識も必要である。

ただマヤ文字の解読といっても、マヤ文字にまつわるいろいろな知識がなければならぬ。そういう広い知識の上にたつてこそ、正しい解読ができるのではなからうか。